

感動 (*Kando*) の心的構造 (3) : 感動の国際比較における共感性・文化特性との関連

Mental structure of *kando* (3): The relevance to empathetic and cultural attributes in cross-cultural comparison of *kando*

上宮 愛^{1,4}, 正田 悠^{2,4}, 安田 晶子^{3,4}, 祐伯 敦史⁴, 伊坂 忠夫⁴
Ai Uemiya, Haruka Shoda, Shoko Yasuda, Atsushi Yuhaku, Tadao Isaka

¹金沢大学, ²京都市立芸術大学, ³一橋大学, ⁴立命館大学

Kanazawa University, Kyoto City University of Arts, Hitotsubashi University, Ritsumeikan University
auemiya@staff.kanazawa-u.ac.jp

概要

本研究では、「感動」の文化的な違いについて検討することを目的として、日本を含む11カ国における大規模な国際調査を行った。参加者に、感動反応尺度、共感性を測定する「対人反応性指標」、文化的な違いを測定する「文脈依存度を測定する質問紙」、分析的思考-包括的思考尺度」への回答を求めた。結果より、多くの国において、「共感的関心」と「感動」、そして、「因果性」と「感動」との間に高い相関がみられた。これらの結果より、文化の違いを超えて「感動」には共通する要因が含まれることが示された。

キーワード：感動 (*kando*) , 文化比較 (cross-cultural comparison) , 共感性 (empathy)

1. 目的

「感動」は、英語では *being moved*, *being touched* などのように表現される場合が多いが、実際にこれらの概念が「感動」と同じものを指すのかという点については議論がある (Yasuda et al., 2022)。Zickfeld et al. (2019) は、19カ国を対象とした国際比較を通して、「感動」と類似する“*kama muta*” (サンスクリット語で「愛に動かされる」という意味) と呼ばれる概念が、複数の文化において共通する要素を持つことを示した。しかし、それぞれの文化のどのような側面が「感動」と関連するのかについて検討した研究はない。本研究では、大規模な国際調査を通して各文化のどのような側面が「感動」と関連するのかについて検討することを目的とする。加えて、“*kama muta*”の中心的な要素とされている「共感性」についても検討することにより、感動と“*kama muta*”との関連についても合わせて検討を行う。

2. 方法

本研究は「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得て実施した。

2-1. 参加者

本調査はオンライン調査の形式で実施した。2023年11

月28日～12月8日の期間でデータ収集がお行われた。日本・中国・インド・フィリピン・オーストラリア・スペイン・ドイツ・フランス・南アフリカ・アメリカ・アルゼンチンの20代から50代までの男女を対象とした。性別および年代が同程度に配分されるよう、データ収集を行なった。各国600名以上の回答を得た。得られたデータのうち、トラップ設問(「この回答にはかならず3を選んでください」など)に引っかかった回答者、および、質問紙尺度においてすべて同じ回答を選んでいる回答者は分析より除外した。最終的には、4044名の参加者の回答を分析の対象とした。

2-2. 調査票

調査画面の冒頭において、「生活の中で、心を動かされたり、何かが心に触れた感じがしたり、あるいは強い印象を受けること」を「感動」と呼ぶと定義した上で、これまでに最も感動した出来事についての記述を参加者に求め、その後複数の尺度への回答を求めた。

感動反応尺度：調査の冒頭で参加者が記述した、「これまでに最も感動した出来事」について、感動反応尺度(11因子33項目, Shoda et al., under review)の各項目が当てはまる程度を7件法により回答するよう教示した。感動反応尺度は、感動に伴って生じる反応を11因子から測定するものであり、その得点が高くなるにつれ感動時にどのような反応が並行して生じていることを示すものである。11因子は、それぞれ「ポジティブ感情」「爽快感」「困難さ」「感動」「涙」「あたたかさ」「克服」「鳥肌」「畏怖」「超越した力」「驚き」である。本研究では、11因子の中でも、「感動」因子の得点と共感性、文脈依存度、そして、分析的思考-包括的思考との関連について検討を行う。

対人反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index ; IRI) :

IRI は、「個人的苦痛」, 「想像性」, 「共感的関心」, 「視点取得」の 4 因子により構成される (日道ら, 2017)。参加者は, 28 項目について 5 件法により回答した。

文脈依存度を測定する質問紙 (Context dependency Questionnaire) : Hall (1976)は, 文化とコミュニケーションとの関連について, 「コンテキスト(Context)」と呼ばれる文化的次元を用いた説明を行った。参加者は, 文脈への依存を測定するための質問紙 (17 項目; Wu et al., 2022) について, 5 件法により回答した。本質問紙では, その得点が高くなるにつれ文脈に依存したコミュニケーションを行うことを示すものである。

分析的思考-包括的思考尺度 (Analysis-Holism Scale ; AHS) : AHS は, 「因果性」, 「異なる意見に対する態度」, 「変化の知覚」, 「注意の所在」の 4 つの因子により構成される (Choi et al., 2007)。参加者は, 24 項目に対して 7 件法により回答を行った。

これらの調査項目は, 日本語版を英語, 仏語, 独語, スペイン語, 中国語に翻訳して使用した。

3. 結果と考察

感動反応尺度の「感動」因子の得点と IRI との関連について表 1 に示した。多くの国において, 「感動」と「共感的関心 (同情などの他者志向的感情の喚起されやすさ)」との間に高い相関があることが示された。これは, 先行研究などで定義されている “kama muta” の研究結果と同じ傾向性を示す (Zickfeld et al., 2017)。共感感動の個人差を説明する指標であり, 文化を超えて共通する関連がみられることが示された。

表1 感動反応尺度の感動因子とIRIの国別の相関

	個人的苦痛	共感的関心	視点取得	想像性
ドイツ	0.03	0.30	0.24	0.17
フランス	0.02	0.21	0.22	0.21
アメリカ	-0.05	0.30	0.27	0.32
オーストラリア	0.06	0.39	0.32	0.33
インド	0.05	0.28	0.32	0.21
アルゼンチン	0.00	0.30	0.24	0.22
フィリピン	0.06	0.31	0.29	0.25
スペイン	-0.03	0.32	0.28	0.27
南アフリカ共和国	-0.09	0.20	0.11	0.11
中国	-0.01	0.37	0.32	0.37
日本	0.12	0.33	0.21	0.25

次に, 感動の文化差についての結果を表 2 に示した。多くの国において, 「感動」と「因果性」との間に高い相関がみられた。「因果性」とは, 「すべての物事は何ら

かの関係で結びついている」という考え方であり, この結果は, 人とのつながりが感動を引き起こすという “kama muta” の研究とも共通する結果であるといえる。

表2 感動反応尺度の感動因子とコンテキスト・AHS尺度との国別相関

	コンテキスト	Analysis-Holism Scale			
		因果性	異なる意見に対する態度	変化の知覚	注意の所在
ドイツ	0.04	0.31	0.24	0.06	0.31
フランス	0.22	0.31	0.28	0.16	0.26
アメリカ	0.09	0.38	0.33	0.20	0.31
オーストラリア	0.14	0.39	0.34	0.09	0.31
インド	0.34	0.38	0.20	0.15	0.28
アルゼンチン	0.09	0.26	0.24	0.11	0.20
フィリピン	0.14	0.35	0.24	0.04	0.22
スペイン	0.13	0.35	0.34	0.12	0.29
南アフリカ共和国	0.04	0.18	0.14	0.13	0.18
中国	0.16	0.39	0.28	0.08	0.24
日本	0.07	0.34	0.27	0.22	0.31

4. 利益相反の開示

本研究は, 立命館大学とヤマハ発動機株式会社との間に締結された共同研究プロジェクト「感動 (Kando) を科学する」の一環として実施されたものである。

5. 引用文献

Choi, I., Koo, M., & Choi, J. (2007). Individual differences in analytic versus holistic thinking. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33(5), 691-705.

Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Anchor Books/Doubleday.

日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, M.H.・野村 理朗. (2017). 日本語版対人反応性指標の作成. *心理学研究*, 88(1), 61-71.

Shoda, H., Yasuda, S., Uemiya, A., Yuhaku, A., & Isaka, T. (under review). Uncovering the essence of moving experiences in Japanese culture: Development and validation of a *Kando* Reaction Scale.

Wu, C., Yama, H., Zakaria, N. (2022). How do Japanese and Chinese view each other? Understanding the meaning of low-context culture in intercultural communication. *Global Networks*, 1-10.

Yasuda, S., Shoda, H., Uemiya, A., & Isaka, T. (2022). A review of psychological research on kando as an inclusive concept of moving experiences. *Frontiers in Psychology*, 13 (974220).

Zickfeld, J. H. et al. (2019). Kama Muta: Conceptualizing and measuring the experience often labelled being moved across 19 nations and 15 languages. *Emotion*, 19 (3), 402-424.

Zickfeld, J. H., Schubert, T. W., Seibt, B., and Fiske, A. P. (2017). Empathic concern is part of a more general communal emotion. *Frontiers in Psychology*, 8, 723.